2007年7月1日執筆

『小説』についての徒然

八重代かりす

私は小説が書きたい。

上手く書けないが、それでも、小説が書きたい。

しかし、残念ながら、私は小説を提出することはできなかった。

何しろ、私は怠け者だし、書くのが遅いし、書き溜めていた長編小説の方は別の人に見てもらっているし、スーパーロボット大戦ＯＲＩＧＩＮＡＬＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳが私の邪魔をするし、精神年齢は十二歳なのに何故か働かなくてはいけないし、そんな言い訳がたっぷりで、困った感じである。

そこで、失礼ながら、とりあえずはエッセイを提出することにした。他の人はどうだか知らないが、私は小説よりはエッセイの方が簡単に書ける。持ち駒の中から、『自由恋愛の構造欠陥について』という魂の入ったヤツを引っ張ろうかとも考えたが、あれは一応論文の体裁をとっているし、まとめる時間もないし、魂が入りすぎて、受けない可能性も高い。初めはやはり無難な方がいい。

私の下手な文章にわざわざ目を通す人は、間違いなく、私よりも読書家だろう。きっと小説も好きだろう。そこで、出せなかった悔しさも踏まえ、今回の主題は『小説』で行こうと思う。

では、小説とは何か？

例えば、みんなが大好き司馬遼太郎先生は『草原の記』の「匈奴」で《小説》について、以下のように書いている。

////////////////////////////

小説とは、かりに定義をいうとすれば、美学的に秩序づけられた妄言(もうげん)といってよく、その意味では、ここに書いていることもまたとりとめもない。

ただし、十九世紀やそれ以前とちがい、世間が精密になっているために、妄言にもいちいち根拠がいる。

（後略）

////////////////////////////

さすが、日本人を根こそぎ熱狂させているだけのことはある。明瞭にして、深遠なる定義だ。ついでに、最近は考証が面倒くさいという真実を的確に言い当てている。彼の先達たる吉川英治の『三国志』などでは張郃が三回も死んでも許されたのに、司馬先生やその後輩にして後述もする宮城谷先生の時代では、許されない。まったく、人は死んだら生き返らないなんて、世知辛い世の中になったものだ。古事記や日本書紀の頃には考えられなかったことである。

また、オタクが大好き宮城谷昌光先生は『管仲』のあとがきで《小説》について、以下のように書いている。

////////////////////////////

正確にいうと、小説は、物語ではない。整理と省約(せいやく)を経た過去形を主な文体とするものではない。なぜ、ということに挑まなければならない。そのなぜが、主題であると同時に、問いと答え

を構造化させて、はじめて小説といえるのである。

////////////////////////////

さすが、Ｔ大学元文藝会長Ｓ先輩に「電波じゃねーか」と言われただけのことはある。実に~~衒学的~~玄学的だ。いや、勿論、それでも――もといそれ故に、私は宮城谷先生に私淑している身だ。文章にも多大な影響を受けているし、尊敬の念を向けてもいる。しかしなんというか、いや、私が無学なのがいけないだけで、わかる人にはわかるのだろうかというか、きっと、偉大な作家として歴史に名を残し、吉川英治から、司馬遼太郎への流れは、宮城谷昌光へと受け継がれるのではなかろうかというか、いや、私は今時の若者だから、吉川英治はほとんど読んでいないというか……。

藪蛇になる前に話を変えよう。

＊＊＊

昔、私は平安時代末期の木曾山中を舞台にした富士見ファンタジア風歴史モノを書いていたことがある。自慢ではないが、『SAMURAI DEEPER　KYO』並みに念密な考証を行った大河浪漫であった。だがいかんせん、実力不足から、執筆休止状態にある。素人がいきなり無茶をやっても成功するはずがないという典型だろう。しかし、その中に当時の（つまり、大陸が宋代の頃の）『小説』について語っている部分があるので、以下に引用する。

誰も読みたくはないって？

だから、私は小説を書きたいんだよ。

＃＃＃

「実際、巴（ともえ）の武勇は尋常ならざるものがありますよ。ご存知ですか？あの娘を後漢末期の飛将温侯呂布に擬える声もあるくらいです」

「なるほど、たしかに張飛や関羽などの万夫不当であっても、あやつには敵うまい。まさに『人中の呂布、馬中の赤兎』ならぬ『人中の巴（ともえ）、馬中の東風（こち）』というわけだ――とりわけ頭が足りぬ辺りがそっくりだな」

「おや、手厳しいですね。ご自分の妹君でしょう？」

「……だからこそ、かもしれぬよ……」

その時、兼光（かねみつ）は自嘲の色を隠そうともしなかった。葵（あおい）は何となく触れてはならぬ気がして、強引に話を変えた。

「しかし、御輿とするのにはあれくらいでいいかと。姿容（すがたかたち）は申し分ないですし、こちらは無知を素朴と受け取ってくれる風土ですから、京に上らぬ限りは品格や教養のなさが足を引っ張ることもないでしょう」

「……まあ、そうだな」
「実際、あたしですら、たまに惚れ惚れしちゃいますからね。あの娘が方天戟を一振りする度に、首が飛んでいく光景を見た時、己の深奥を貫かれた気分になりました。まさに『呂布、方天戟を片手に、無人の野を行くが如し』というやつでしょう」
　すると兼光は「待て」と制する。
「あの時代に方天戟なんてあったのか？というか、技術的に可能なのか？今あいつが使っている方天戟とて、宋代に入ってからの製鉄技術向上の賜物だろう。それに俺も陳寿の三国志などには目を通しているが、呂布が使っていたのは槍だったような気がするぞ」
　思わず葵は
　――細かいところを気にする。
　と苦笑した。学者肌の兼光はこういう時に拘泥するのだ。話を逸らすのには成功したが、これでは行き過ぎかもしれない。
「ああ、そういうのじゃありませんよ。こういうのです」
　食い付いて来る彼を宥める為に、葵は最近買い集めている漢籍を彼に手渡す。予め、該当する項目を開いておいたので、兼光もすぐに気付いただろう。
　たしかにそこには
　――首者溫侯呂布、身長九尺二寸、使方天戟、無人可當。
　という一節があった。しかし、それは……、
「……お前、《小説》なんか読んでいるのか？」
　兼光は露骨に眉を顰めた。
「おかしいですか？」
「巴ならば、ともかく、お前にはもっとちゃんとしたものを読んでもらわなくて困る」
「これはこれで、面白いのですけどねえ」
　葵は宥めたが、やはり、堅い兼光には《小説》などというものは受け入れがたいらしい。
　とはいえ、兼光がとりわけ保守的というわけでもない。いや、むしろ、この時代の知識人の中ではむしろ多数派だったのだろう。
　小説という言葉は、元々、
　――小人（しょうじん）の説話
　という程度の意味だろう。勿論、ここでいう『小人』とは、物理的な意味での『小さな人』ではなく、儒教的な蔑称だ。すなわち、儒教的な理想人格である『君子』と対を成す概念であり、要するに『女子供』や『知性も道徳も持たぬ蒙昧なる愚民ども』を指している。実際『君子』候補である士大夫階級にしてみれば、ろくに読み書きもできぬ『小人』たちの説話などまともに相手にする気にはなれなかったのだろう。しばしば用いられるように荘子の外物篇などには
　――小説を飾り、以て辞令を幹とし、其れ大達すること亦た遠し
　とある。さしずめ、『小説は派手に飾り立ててあるが、中身が薄い。立派な読み物には程遠い』という感じだろうか？いずれにせよ、兼光を含む儒教圏の知識人にとっては、小説というシロモノは
　――取るに足らない連中の取るに足らない読み物
　という認識であったのだ。なるほど、確かに『《小説》は派手に飾り立ててあるが、中身が薄い』

という評価は的外れではない。この時、葵が手渡し、兼光が蔑んだ《小説》は

――三国志平話

という題の話本であるが、これにはなんと一頁につき一枚の挿絵が付いていた。識字率が低いこの時代『小人』はろくに字が読めない。だから、絵で補ってやろうという発想なのだろう。これは古くは『楚辞』、あるいはこの後流行る『平家物語』が、話の中身を歌や節に乗せることで字の読めない階層に物語へ伝えられた事例と似ている。

涙ぐましい努力とさえいえる。しかしながら、一頁につき一枚の挿絵というのは幼児向けの絵本の水準だ。無論、当時の庶民の読解力などその程度のものであったのだが、それ故に兼光の如き知識人との乖離が著しかったのである。また、物語の中身も派手さとっつきやすさ、俗物根性と商業主義に重点が置かれており――この辺り、この頃の小説とは後世の言葉で言うところの

――Light_Novel（ライト ノベル）

に近い意味合いだった。いや、むしろ、軽佻浮薄な《軽（ライト）》小説（ノベル）こそが、まさに小説本来のあり方であったといえる。勿論、その後、小説という文化が洗練と爛熟の結果、良くも悪くも芸術性を発達させていったことは間違いない。この後、大陸が元代に入って、食うに困った士大夫階級が嫌々ながら、小説執筆で飯を食う羽目になり、この《三国志平話》を元に《三国志演義》という（一応は）知識人にとっても読み応えのある《小説》を生み出すことになるのは、その著名な例であろう。

もっとも、その一方で原点回帰を望む者たちも生まれたのであるが……。

いずれにせよ、この時点での《小説》は兼光にとって受け入れがたい文化であった。しかも、彼のような人間にとっては腹立たしいことに、この時期、宋ではこの手の《小説》が蔓延りつつある。経済発展による庶民の生活水準の向上と、印刷技術の急速な発展及び普及が『字を読む』という行為の裾地を広げているのだ。無論、それ自体は兼光にとっても歓迎すべき事態である。ただ、いわゆる『郷原は徳の賊』とでもいうべき状況が広がっていることを嘆いている。知識を得ることが容易になった分、中途半端な知識人が繁殖している。きちんとした師と書の下で学んだわけでもないのに、そこら辺に転がっている下等な本に感化されて、知識人を気取る愚か者が増えることを恐れている。生兵法は怪我の元。世間の者たちが（自分のような）ちゃんとした知識人の言葉から耳を背け、似非知識人の言葉に惑わされるようになっては、必ずや芳しからざる結果を招く。

少なくとも、兼光にとっては危惧すべき状況ですらあった。

再び、後世の例を上げれば、インターネットなどの普及で便利になった情報収集に対し、『体系的な知性を欠いたものが幾ら断片的な知識を集めたところで、百害あって一利なし』と非難する態度に近いのだろう。

それも一理はある。葵もそういう立場の意見を否定するつもりはない。量的拡大が質的低下を招くという事例を理解していないわけではないのだ。

――しかし、自称『ちゃんとした知識人』は本当に『ちゃんとした知識人』なのだろうか？また『似非知識人』は永久に『似非知識人』なのだろうか？そして、そもそも、両者の区別は誰が決めるのか？

少なくとも、兼光と異なり正統派の教育を受けることができなかった自分は『ちゃんとした知

識人』ではないはずだ。では、自分は『似非知識人』ということになる。

だが――『似非知識人』の葵にも『似非知識人』としての誇りというものがあるのだ。

だから、どうしても気になる。

多分、これが生まれの差というやつなのだろう。孤児同然だった葵と信濃権守の息子である兼光の間にある隔絶なのだ。

兼光が自分を買ってくれていることを葵は知っている。実の妹である巴よりも下女上がりに過ぎぬ自分の方を高く評価してくれることに、嬉しくもなる。しかし、時々、この手の齟齬がどうしようもなくやりきれなくなることがある。

自分が巴のことが好きなのは、だからこそ、なのかもしれないと葵は思う。

まあしかしいずれにせよ、兼光のこの様子を見る限り……。

――とりあえず、源氏物語みたいなエロ同人誌だけは隠しておいた方がいいな。

葵は密やかに決意した。

＊＊＊

もっと言えば、葵は日本でこの後、漢書よりも史記が、論語や春秋などの四書五経よりも三国志や水滸伝などの四大奇書が流行るであろうことをおぼろげながらに予見している。

漢書や四書五経は、中国の長い歴史と伝統による研鑽の上に誕生した重厚なる文化的産物である。しかしながら、その歴史や伝統とはあくまでも『中華系知識人にとっての歴史と伝統』でしかない。そして、歴史と伝統の上に書かれたものであるから、その歴史と伝統を知っていることを前提に書かれている。逆に言えば、『中華系知識人にとっての歴史と伝統』を知らないものにはまるで意味不明のシロモノなのだ。だから、漢書や四書五経は日本ではそれほど流行らない（たしかに多くの日本人は『中華系知識人にとっての歴史と伝統』を一定具えているが、やはり、限界があるのだ）。

一方の史記や四大奇書は、初めから庶民向けである。まあ、史記については、完全にそうとは言い切れないが、鬱憤の溜まった司馬遷が個人で書いているためか、その激情がそのまま文章の物語性として反映されている（勿論、歴史的学術的精度も相当のものであるが）。少なくとも、王朝の公式記録として、官僚の集団作業で記述されたため、正確だが無味乾燥な文字の羅列になりがちであった漢書よりは、はるかに読み易いだろう。四大奇書のように初めからエンターテイメントとして製作されたものについては言うまでもない。『知性も道徳も持たぬ蒙昧なる愚民ども』にも理解できるように、様々な工夫がされている。これならば、『中華系知識人にとっての歴史と伝統』を具えていない日本人にも、十分、理解できるというものだ（十八史略などもこちらに含まれるかもしれない）。

この構図は、現代日本の文化輸出においても、能や歌舞伎よりもマンガやアニメの方が普及しやすいのと似ている（勿論、能も歌舞伎も元は民間の低俗な文化であったが、時代が下り、洗練されるのと引き換えに、オペラなどと同様『歴史や伝統』のシロモノになってしまったのである）。能や歌舞伎が、予備知識のないものにとって、いかに意味不明であるかは語るまでもない。

もっとも、マンガやアニメにしたところで、それが歴史や伝統となってしまえば、似たような弊害を抱えてしまうだろう。『攻殻機動隊』を初めて読んだ中学一年生はいささか戸惑うだろうし、

『オーガニック的な何かがオルファンに共鳴しているんだ！』とか言い出すアニメは、果たして、一般受けするのだろうかという問題もある。

三国志平話は、主人公が張飛であり、曹操や諸葛亮はあまり活躍しない。そのせいか、水滸伝や週刊少年マガジンのヤンキーものに近い雰囲気がある。つまり――インテリは基本的に悪い奴で、しかも、机の上でお勉強ばかりしてきたから、世間のことを何も知らない駄目な奴で、対する学歴がない俺こそが現実を知っており、『本当の頭のよさ』を持っている立派な人間なのだ――という、その手の輩が大好きな世界である。しかも、オカルト関係の話が多く、その上、一騎当千の武将が比喩ではない一騎当千の活躍をしたりする。兼光のように真面目に戦術戦略を習った人間からすれば、馬鹿馬鹿しくてやっていられないだろう。

――しかし、それでいい。そこにこそ《小説》の価値がある。

それ故にわかりやすく、面白く、そして、訴えかけるものがあるのだと葵は考えている。

――《小説》はそうでなければいけない。

＃＃＃

水滸伝のように美少女戦士が刀を振るい、金瓶梅のようにお色気が利いていて、西遊記のように魔法が溢れ、三国志平話のように超人バトルを繰り広げられ、しかも挿絵が一杯で、文章も読み易い。

それこそが《小説》なのだ。

それこそが、私にとっての《小説》であり、また《小説》そのものの本道でもある。別に他の類の《小説》が悪いと言っているわけではないし、それなりのよさがあることも認める。しかし、いわゆる文学などというシロモノは『小人（しょうじん）の説話』から見れば、やはり、邪道であろう。時々、ライトノベルを『軽い小説』と表現することがあるが、語義から考えれば、おかしな話である。そういう表現の仕方は、むしろ好きであるものの、『軽い小説』なんて『白い白馬』と似たようなものなのだ。《小説》とは、そもそも、軽いものはずなのである。

思うにライトノベルとは、邪道から本道への原点回帰の文化ではなかろうか？

ライトノベルとは『軽い小説（light_nobel）』ではなく、『正しい小説（right_nobel）』なのではないのだろうか？

いかにも、ラノベ以外に活字は読まない人間が『ラノベこそが小説なのだ！』と己の世界観の薄さと狭さをひけらかしている文章であるが、いかがだろう？まあ、蔑まされている方が《小説》として自然なあり方なので、ライトノベルは『軽い小説（light_nobel）』でいいとも考えているが……。

だったら、せめて、もっと読み易い文章を書け？

ごもっとも。